

旧松方コレクションに由来するイタリア絵画の調査報告

高梨光正（国立西洋美術館）

国立西洋美術館創設のきっかけとなった旧川崎造船社長松方幸次郎氏が 1920 年代にヨーロッパで蒐集した作品は、主にロンドンで焼失したのものや、パリに保管され、第2次大戦後敵国財産として接收され、その後の外交交渉により 1959 年西洋美術館発足とともに日本に寄贈返還されたものが大部分を占めるというのが一般的な印象である。しかし、戦前に「共楽美術館」の創設を夢見ていた松方はかなりの作品をすでに日本に持込んでおり、1928 年の川崎造船破綻の際に各方面に抵当として散逸することになったものの、その一部は現在でも日本国内の個人所有者の手に残されている。今回発表者の調査により、東京のある個人蔵の旧松方コレクションに由来する作品群の中には、少なからぬオールドマスターの作品が含まれていること、とくに 15 世紀イタリアの板絵に加え、残念ながら状態は決して良くないとはいえ、古くはオランダ出身で、主にイギリスで活躍した画家兼素描蒐集家ピーター・レリー、リチャードソンらのコレクターマークのある素描群の残されていることが明らかとなった。

現在所蔵者側に伝えられている作家名等の情報は、近年の研究成果を踏まえると大幅な修正が必要とされが、発表者の調査によりいくつかの作品に関して新たな作者名を特定することができた。そのひとつは、アレツォの画家パツリ・スピネッリに帰属されている《戴冠の聖母》は、近年になりようやく研究の進められてきたピストイアの通称「ブラッチョリーニ礼拝堂の画家」であることにほぼ疑いの余地はない。また「ボッティチェッリ派」とされている《聖母子》も近年ランドルフィにより「ジョンソン降誕図の画家」として知られる 15 世紀後半の逸名画家の作品として写真入りで紹介されるにいたっている。また、バルトロメーオ・ヴィヴァリーニの《聖母子》は、状態が極めて劣悪ながら、この画家の最初の年記署名入りの作品としてボレニウスが 1911 年にアイルランドのヒュー・レイン卿所蔵として紹介していたものの、ロベルト・ロンギがその作者帰属に疑問を呈して以来、コルプスからは外されている作品であることが確認された。また素描群の中には、ヴェローナ出身のアントーニオ・バレストラがヴェネツィアのサン・スタエ聖堂のために 1722 年に制作した油彩画《福音書記者聖ヨハネ》の準備素描が残されている可能性が非常に高いことが分かった。その他、パルミジャーノの周辺、あるいはポルデノーネの弟子アマルテオの手によると考えられる素描も見いだされる。

こうした貴重な作品群が日本に現存することを紹介するとともに、今後の調査の方向性とその問題点を検証しておきたい。